

育成の重要性が高まる資質・能力

読解力とは何か？



新年度がスタートしました。今年度は、年次進行で実施されてきた新学習指導要領がいよいよ全面実施となります。その学習指導要領の改訂に影響を与えてきたものの1つに、OECDが進めている国際的な学習到達度に関する調査「PISA」があります。昨年の12月に公表された2022年調査（PISA2022）では、前回の18年調査からOECD加盟国の平均得点が低下した一方で、日本は数学的リテラシー、読解リテラシー、科学的リテラシーの3分野すべてにおいて平均得点が上昇し、世界トップレベルの結果を残しました。中でも、読解リテラシーが前回の調査から大きく順位を上げたことは、新聞やインターネット等の報道で大きく取り上げられ、注目を集めました。読解力というと、以前は、国語科や英語科で育成する力と捉えられることが少なくなかったかもしれませんが、近年は、どの教科・科目等においても育成すべき力、いわゆる教科横断的に育む資質・能力としての認識が広がっています。では、今求められている読解力とは、どのような力なのでしょうか。本特集では様々な知見や実践を基に、読解力をひも解いてまいります。

VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 Introduction

PISA型読解力とはどのような力か。どのように育んでいくのか
早稲田大学教職大学院 教授 田中博之

P.8 Column

PISA2022の結果分析 ベネッセ教育総合研究所 教育イノベーションセンター長 小村俊平

P.10 Case1 世界史で育む読解力 埼玉県・私立立教新座中学校・高校

資料を読み解くプロセスを整理し、歴史を解釈・批判する力を育む

P.14 Case2 情報で育む読解力 神奈川県立横浜国際高校

ICTを問題解決のツールとして活用し、情報を多面的に読み取り、伝える力を高める

P.18 Case3 探究学習で育む読解力 北海道名寄高校

「短探究」で身につけたスキルを駆使し、総合探究や教科学習で様々な素材を読み解く

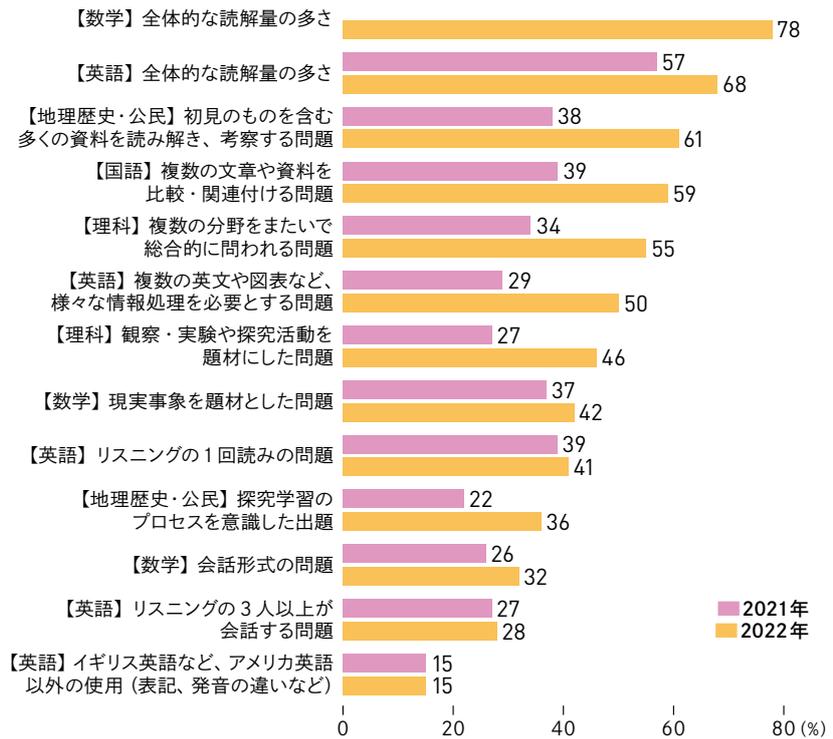
P.22 Dialog

安全・安心な環境で「なぜ」を問い続け、社会で求められる読解力を育む
つくば言語技術教育研究所 所長 三森ゆりか × 北海道・市立札幌藻岩高校 対馬光揮



図1

大学入学共通テストにおいて、今後の対応が必要となりそうな問題や特徴



※数値は、大学入学共通テスト受験者がいると回答した学校(2021年調査は939校、2022年調査は848校)のうち、各項目について「今後の対応が必要となりそう」だと回答した学校の割合。
 ※【数学】全体的な読解量の多さの項目は2022年調査より新設。
 ※ベネッセコーポレーション教育情報センター「2022年度 新課程および教育活動全般に関する調査」

学

校現場でも「読解力」の重要性を強く意識していることを示すデータの1つが、図1だ。問題のページ数や総単語数も多く、様々な資料・題材が取り上げられる大学入学共通テストにおいて、「今後の対応が必要となりそうな問題や特徴」として現場が捉えているものの多くが、いわゆる「読み解き」に関連するものであることが分かる。

一方、PISA2022では、日本の読解力の平均得点は上昇し、順位も回復した(図2)。

以上のように、近年注目が集まる読解力だが、それ

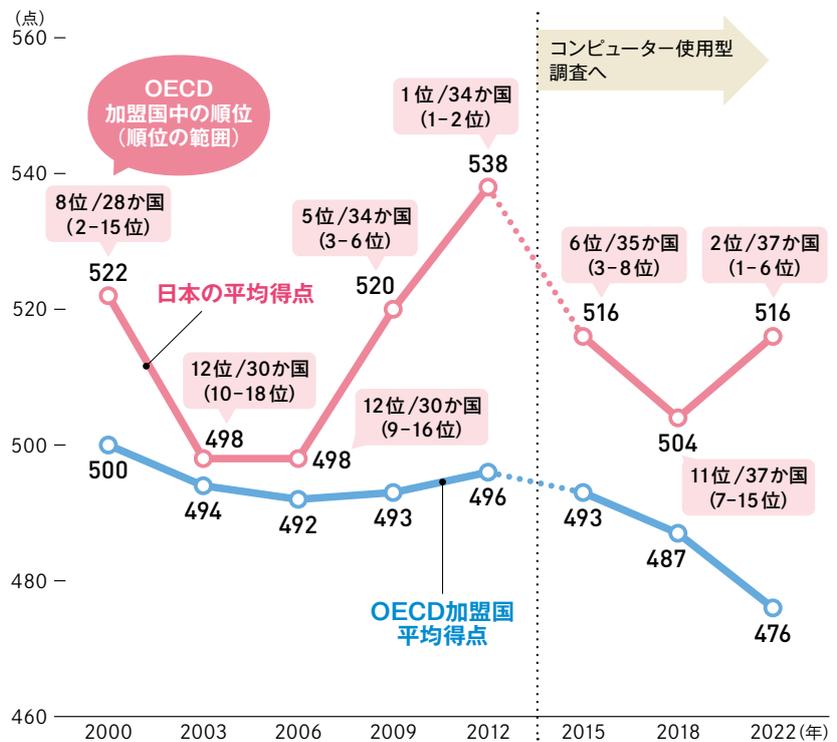
は具体的にどのような力なのだろうか。そしてそれは、どのようにして育成していけばよいのだろうか。

先生方とともに
考えたい「問い」

今後求められる読解力とはどのような力で、それをどのようにして育むのか？

図2

PISAにおける読解力の順位と平均得点の推移



※文部科学省・国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査 PISA2022のポイント」を基に編集部で作成。

PISA型読解力とはどのような力か。 どのように育んでいくのか

早稲田大学教職大学院 教授 **田中博之**

21世紀社会を生きる上で必要となる主要な資質・能力の1つとしてOECDが提起したPISA型読解力とは、どのような力なのか。それは日本の学校教育や大学入試に、どのような影響を及ぼしてきたのだろうか。PISA型読解力の定義からその資質・能力を育む指導までを、学力調査のあり方について研究を続けてきた専門家に聞いた。

PISA型読解力は日本の教育改革の軸

学習指導要領の改訂を 方向づけたPISA型読解力

PISAは、OECDが進める国際的な学習到達度調査で、15歳児を対象に読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査します。読解リテラシー（原文は「Reading Literacy）」、すなわゆるPISA型読解力は2003年、OECDが規定した能力概念「キー・コンピテ

ンシー」の枠組みの中で、21世紀社会を生きる上で必要となる主要な資質・能力の1つとして提起されました。以来、PISA型読解力は日本の教育政策に影響を及ぼし続けています。

文部科学省は、PISA型読解力を、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」であると、その結果分析の中で記しています

たなか・ひろゆき 大阪教育大学助教授、教授などを経て、2009年度より現職。1996年及び2005年、文部科学省長期在外研究員制度により、ロンドン大学キングズカレッジ教育研究センター客員研究員を、2007年度から18年度まで、文部科学省の全国的な学力調査に関する専門家会議委員を務める。著書・編著書に、『教師のためのChatGPT活用術』（学陽書房）、『高等学校 探究授業の創り方』（学事出版）、『主体的・対話的で深い学び』学習評価の手引き』（教育開発研究所）など。

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

読解力とは何か？

情報の取り出しにとどまらず、幅広い力を見る

情報の取り出しから解釈、
熟考・評価までを含む

PISA型読解力とはどのような力なのか、具体的に見ていきましょう(図1)。

PISA型読解力は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」であることは既に述べました。その具体的な能力領域として

(*1)。従来の日本の学校教育で育成してきた読解力は、教科書の素材文を正確かつ詳細に読む力でしたが、PISA型読解力は、実社会に存在する多様な資料やデータを比較・分析し、それによって分かったことを自分なりに解釈・評価し、他者に分かりやすく伝えるという、総合的な学力を示しています。

2004年に発表されたPISA 2003(第2回調査)の結果で、日本は読解力が14位に(第1回8位)、

数学的リテラシーが6位に(第1回1位)に下がりました。いわゆる「PISAショック」を受けて、児童・生徒が課題を設定し、様々な資料やデータを活用しながら問題を解決していくような学びを重視すべく、学習指導要領が改訂されてきました。大学入学共通テスト(以下、共通テスト)が複数の多様な資料や日常生活に関連した題材から必要な情報を読み取ることを求める出題となっていることも、PISA型読解力を踏まえてのことです。

設定されているのが、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の3つの項目です。

また、従来の日本の学校教育で育成を目指してきた読解力と比較すると、PISA型読解力の特徴として、「テキストに書かれた情報の取り出しだけでなく、解釈、熟考、評価も含む」「ただ読むだけでなく、テキストを利用して見たり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりする」「テキストの内容だけでなく、構造・形式や表現法も

図1

PISA型読解力とはどのような力か

PISA型読解力を構成する能力領域

- 情報の取り出し
- 解釈
- 熟考・評価

文部科学省の解釈によるPISA型読解力の特徴(従来の読解力との比較)

- ①テキストに書かれた「情報の取り出し」だけでなく、解釈、熟考、評価も含む
- ②テキストを読むだけでなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含む
- ③テキストの内容だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となる
- ④テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけではなく、図やグラフ、表などの「非連続型テキスト」も含む

※田中教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

評価する」「テキストは文章だけではなく、図やグラフ、表などの非連続型テキストも対象とする」といったことが挙げられます。

PISA型読解力を測る
問題の特徴とは？

次に、PISA型読解力が、どのような問題によって測られるのか、見ていきます(P.6図2)。

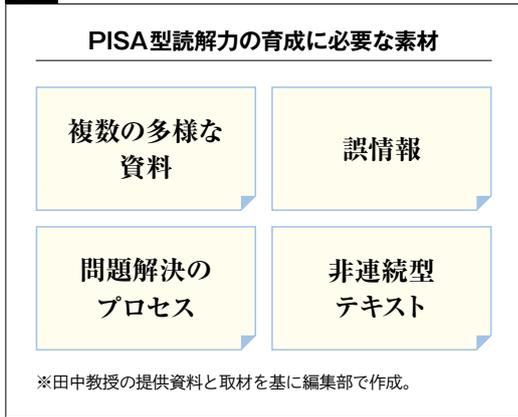
PISAでは、複数の多様な資料を比較・分析して、各資料の要旨を捉え、自分なりのメッセージをつくることのできるかどうか問われます。情報化が進展する21世紀を生きる子どもたちには、文学などを通して人の機微に触れ、感受性を養うとともに、多様で大

量の情報を処理し、それらの要旨を捉え、自分なりのメッセージをつくる力が求められています。そうしたことを踏まえて、PISA、そして共通テストでも、多様な複数の資料を活用する問題が出されているのです。

情報社会では、正確な情報や有用な情報だけでなく、誤情報や意図的につくられた偽情報もあふれています。そのため、複数の情報を比較して、より適切な情報を見抜くことを求める問題もPISAでは出されています。文部科学省が全国の小・中学校の最高学年の全児童・生徒を対象に実施している全国学力・学習状況調査でも、誤情報を探し出して記述させる問題を出しています。その意図はPISAと同じです。

* 1 文部科学省「平成16年度 臨時全国都道府県・指定都市教育委員会 指導主事会議 PISA調査における読解力の定義、特徴等」

図2



またPISAでは、実験や仮説の検証などの過程を再現したテキストの読み取りも求められます。日常生活や学校での学習場面などでの問題解決のプロセスを出題して、複数の教科に関連する知識・技能を活用した読み取りを求めているのです。

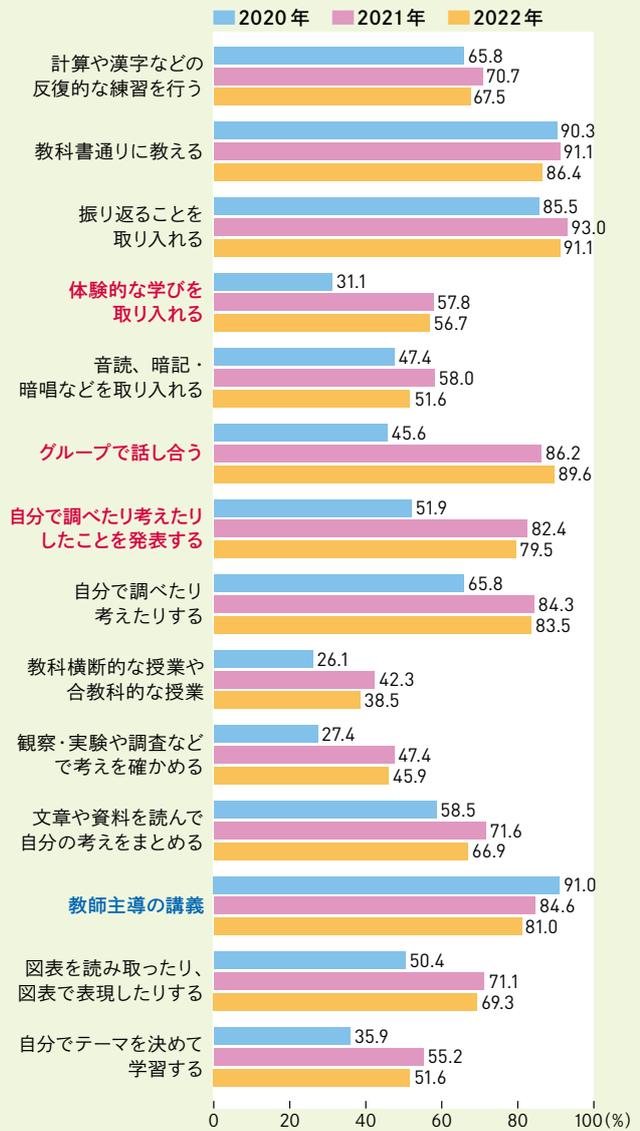
PISAの問題文が長いのは、実験などのリアルな場面を再現するために説明が必要だからであり、長文を読ませること自体が評価目的ではありません。そのことは、共通テストの問題にも言えます。つまり、PISA型読解力が求められるような問題を解けるようになるためには、長い文章をただ読めるようになるだけでは不十分であ

り、問題解決のプロセスなどを実際に経験することが必要です。

PISAでは、図やグラフなど、非連続型テキストが盛り込まれた文章が問題の中に登場します。それも共通テストとの共通点です。既に小・中学校では、国語の教科書にも図やグラフ、地図などの非連続型テキストがふんだんに盛り込まれていますし、小学校高学年からは、図やグラフを用いたレポート作成にも取り組むなど、授業改善が進んでいます(Data)。

Data 中学校の教科の授業方法（経年比較）

中学校では、2020年からの2年間で「教師主導の講義」が減少した(91.0% ⇒ 81.0%)のに対して、「体験的な学びを取り入れる」「グループで話し合う」「自分で調べたり考えたりしたことを発表する」は20%以上増加。



※「よく行っている」+「時々行っている」の%。
※ベネッセ教育総合研究所「小中高校の学習指導に関する調査2020-2022」

読解力を育む指導のキーワード

探究学習を通じて読解力を育む

PISA型読解力を育成するためには、学校にはどのような指導が求められるのでしょうか。ここでは、「探究学習」「反駁・反証」「アウトプット」という3つの活動をキーワードに考え

ていきます。

探究学習

問題解決のプロセスを読む際には、主体的に課題に取り組み、その中で問題を分析したり、他者に自分の考えを伝えたりした経験があった方が、問題文の状況を理解しやすいでしょう。定理・公式や法則をただ

読解力とは何か？

覚えることだけが、教育の本義ではありません。身につけた知識・技能を実際に問題解決に役立て、生きて働くものとして習得することこそ重要であり、そうした力を評価するPISAや共通テストでは、実際に問題解決に取り組んだ経験がある生徒が取り組みやすい問題を出しています。

問題解決を経験する場として最適なものは「総合的な探究の時間」ですが、それだけでは十分とは言えません。各教科の授業においても、それぞれの特質に応じた見方・考え方を働かせながら、生徒自身が課題を設定し、複数の多様な資料を読み解き、自分の考えを表現していくような探究のプロセスを取り入れていくとよいでしょう。

反駁・反証

SNSが身近なコミュニケーションツールとなる中、フェイクニュースにだまされたり、フィッシング詐欺の被害に遭ったりする人は、年齢を問わず少なくありません。誤情報も多く紛れている情報の海の中から正確なものを見抜く力は、まさにこれからの社会を生き抜くために必要な読解力として、すべての人に不可欠です。そうした力を養うためには、授業の中で反駁（他者の意見に対して論じ返すこと）や反証（相手の主張が間違っていることを証

拠によって示すこと）の経験を積むことが重要です。実際、欧米の高校では、レポートを読んで、その中にある誤情報を見つけてだけでなく、それが誤情報と言える理由は何かを生徒同士の議論を通じて明らかにしていくような授業、つまり、正しいことを証明するのではなく、誤りであることを証明するような授業が行われています。

他者と建設的に批判し合うことを恐れているのは、国際社会で多様な価値観を持つ人々と協働し、新しい価値を創出することはできません。ぜひ日々の授業の中でも、反駁や反証に取り組み機会をつくっていただきたいと思えます。生徒同士での反駁、反証が難しいようであれば、最初は教師がわざと誤情報を入れた文章や図を作成し、それらを批判させてもよいでしょう。生成AIを活用すれば、出典元が確かなデータの中にわざと誤情報を盛り込んだテキストを作成することも容易なはず

論理的に書くことを通じて、読解力が高まっていく

アウトプット

PISA型読解力は、書く力と連動しています。私が接している学

生たちを見ても、テキストをしつかり読むことができる学生は、構成が論理的で、誤字・脱字や文法上の間違いが少ないレポートを書くことができます。そして、読む力と書く力のある学生は、ゼミなどでの議論も巧みに行えます。

読解力を高めるには、様々なテキストを読むだけでなく、読んで分かったことや考えたことをまとめたり、そのまとめを他者に伝えることを意識して構成し直し、表現したりするアウトプット活動が欠かせないと私は考えています。高校の授業でも、生徒が作文やレポートなどを書くアウトプットの場

面はたくさんあると思います。そうした教育活動の中で、生徒の主張とその根拠は明確か、正しく、説得力のあるものかなどを見取ることが、書く力とともに読解力が伸びていくでしょう。

PISA型読解力は、アウトプットにつなげてこそ、育成・評価することができますものだと私は考えています。そしてそれは、分かったこと、考えたことをアウトプットして初めて、他者に貢献ができる資質・能力となります。先生方には、ぜひ生徒のアウトプットの機会を充実させていただきたいと思います。



PISA2022の結果分析

2023年12月にPISA2022の結果が発表された。
世界81の国・地域の15歳児が受検した同調査で、日本は好成績を収めた。
その要因をここでは解説する。

前回調査から 読解力の順位が大きく上昇

PISAでは、読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について、コンピューターを使ったテスト形式で、15歳児の学力を測っています。23年に発表されたPISA2022（調査は22年に実施）の結果において、日本は、調査に参加した国・地域中、読解リテラシーが3位（OECD加盟国中

2位）、数学的リテラシーが5位（同1位）、科学的リテラシーが2位（同1位）と、いずれも世界トップレベルを維持しました。特に、前回（調査は18年に実施、15位（同11位）だった読解リテラシーが、今回の調査では大きく上昇しました。

なぜ、日本は今回、好成績を収めることができたのでしょうか。しかも、多くの国が前回から平均得点を下げた中で、日本は平均得点を上げました（図1）。その要因の1つとして考えられるのが、

新型コロナウイルスの感染拡大のために休校した期間が、日本は他国に比べて短かったことです。コロナ禍の中で日本の先生方が子どもたちの学びを止めないよう努力されたことが、今回の結果に結びついたといつことです。また、学校現場で主体的・対話的で深い学

びの実現など、学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだことや、学校にICT環境が整備され、生徒が端末の使用に慣れたことなども、好成績を収めた要因として考えられます。PISAは、15年の調査からCBT（*2）形式で実施されて

いますが、ICT環境が学校現場で十分に整っていなかった日本は、コンピューターの操作に不慣れな生徒が、持っている力を発揮し切れなかったのではないかと考えられます。今回はGIGAスクール構想が実現したことで、日本の子どもたちが本来の力を発揮できたものと考えられています。

ICTを活用した 探究学習の充実が重要

全国の高校の先生方とお話すると、「総合的な探究の時間」や各教科の授業を通じて、PISA型読解力を育むような取り組みが増えていると実感します。例えば、1つの出来事を多角的な観点か

図1（*1）

PISAにおける読解力の順位と平均得点

順位	国 ※（ ）は前回の順位	平均得点 ※（ ）は前回の平均得点
1	アイルランド(4)★	516(518)
2	日本(11)	516(504)
3	韓国(5)	515(514)
4	エストニア(1)	511(523)
5	カナダ(2)★	507(520)
6	アメリカ(9)★	504(505)
7	ニュージーランド(8)★	501(506)
8	オーストラリア(12)★	498(503)
9	イギリス(10)★	494(504)
10	フィンランド(3)	490(520)
OECD加盟国平均		476(487)

※国名の後に「★」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を1つ以上満たしていないことを示す。



【解説者】
ベネッセ教育総合研究所
教育イノベーションセンター長
小村俊平 こむら・しゅんぺい

2015年にスタートした、近未来において子どもたちに求められるコンピテンシーと、その育成につながるカリキュラムや教授法、学習評価などを検討する「OECD Education 2030プロジェクト」に参画。これからの児童・生徒が身につけるべき資質・能力の定義に貢献した。PISAの創始者であり、教育政策の世界的権威であるアンドレアス・シュライヒャーOECD教育・スキル局長兼事務総長教育政策特別顧問の著書『教育のワールドクラス—21世紀の学校システムをつくる』（明石書店）の企画・製作・翻訳にかかわった。

* 1 図1～3は、文部科学省・国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査 PISA2022のポイント」を基に編集部で作成。
* 2 Computer Based Testingの略。コンピューター上で実施する試験。

これからの社会を生きる上で必要な読解力を、
学校現場はどのように捉え、育んでいるのだろうか？

ここまで、PISA型読解力とはどのような力で、それをどのように育んでいくのを見てきた。PISA型読解力は、学習指導要領のあり方にも大きな影響を与え

ており、大学入学共通テストで複数の多様な資料が教科を問わず問題文中に提示されているのも、PISA型読解力の育成を重要な目的の1つとしてきた初等中等教育

を踏まえてのものだ。
生徒に必要な資質・能力の1つとして読解力を挙げる教師は少なくない。では、そうした教師が育成を目指す読解力は、どのような力なのだろうか。そしてそれをどのようにして育んでいるのだろうか。学校現場の実践から、読解力を捉えていく。

図2(*1)

ICT活用調査		
「学校でのICTリソースの利用しやすさ」指標		
5位	日本	0.31
OECD加盟国平均		0.00
「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標		
29位	日本	-0.82
OECD加盟国平均		0.01

※ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、学校でのICTリソースが利用しやすいことや、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

ら比較分析したり、学校外の立場が異なる人々と社会課題について対話したりするなど、内容を深く理解・熟考するようなものです。
ただ、課題もあります。PISAではICTの活用に関する調査も行っていますが、日本は「ICTリソースの利用しやすさ」がOECD加盟国の中でも上位であるにもかかわらず、「ICTを用い

図3(*1)

生徒質問調査				
「生徒の学校への所属感」指標				
順位	国	2022年	2018年	
1	オーストリア	0.44	0.40	
2	スイス	0.36	0.30	
3	スペイン	0.27	0.46	
4	ドイツ	0.27	0.28	
5	韓国	0.26	0.28	
6	日本	0.25	0.02	
7	ノルウェー	0.23	0.36	
8	アイスランド	0.16	0.10	
9	ハンガリー	0.14	0.07	
10	デンマーク	0.11	0.21	
OECD加盟国平均		-0.02	0.00	

※OECD加盟国37か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、学校への所属感が高いことを意味している。

た探究型の教育の頻度」は最下位という結果になりました(図2)。
ICTは、データを比較・分析したり、多様な他者とながったり、考えたことをまとめて発表したりする際に、とても役立つツールです。ICTを活用する授業を教師が考え、実践することで、生徒が読解力の必要性を身をもって実感したり、身につけた読解力を発揮して学びを

深めたりする場面を増やしていくことができると思います。

ウェルビーイングな学校で 読解力を育む

今回の調査の中で特に私が先生方と共有したいと思ったのが、教育におけるウェルビーイングに関する調査結果です。

同調査では、「学校の1員だと感じている」「他の生徒たちは私をよく思ってくれている」「学校ですぐに友達ができる」などの質問項目を基に、生徒の学校への所属感を分析していますが、日本は前回調査から大きく回復しました(図

3)。不登校の生徒の増加という看過できない現実がありますが、先生方の努力によって生徒の学校への所属感は全体的には高まっているということを、知っていただきたいと思っています。生徒がウェルビーイングでいられる学校だからこそ、間違いを恐れずに自分の意見を表現し、建設的に批判し合う中で、他者と協働するために必要な読解力を生徒は身につけていくことができると考えます。

読解力は、教師から示されたテキストを読み取る時だけに必要な力ではありません。情報があふれる社会で、目的とする情報を的確に選ぶ取るために必要な力であり、大学や社会で主体的に学び続けるために不可欠な力です。日本の学校の先生方には、PISAを通して明らかに、生徒に育まれている読解力をさらに伸ばすためにも、探究学習をこれからも各校で推進していただきたいと思っています。

世界史 で育む読解力

資料を読み解くプロセスを整理し、 歴史を解釈・批判する力を育む

埼玉県・私立立教新座中学校・高校

世界史を担当する立教新座中学校・高校の荒井雅子先生は、PISA型読解力を基に、非連続型テキストなどの読解のプロセスを整理。読解のレベルを徐々に深化させていく。スモールステップの問いにより、歴史を解釈・批判する力の育成を図っている。

PISA型読解力のステップを 援用し、資料を読み解かせる

立教新座中学校・高校の荒井雅子先生は、世界史の授業で、図表などの非連続型テキストを含む様々な資料の読み解きを通して、PISA型読解力と歴史を解釈・批判する力の育成を図っている。

荒井先生がPISA型読解力の育成を意識し始めたきっかけは、2011年、独立行政法人国際協力機構が実施する教師海外研修で、「フォトランゲージ」という学習手法を知ったことだった。フォトランゲージは、写真や絵の中の情報を読み取り、自分の意見を明らかにしていくもので、分かっただけで考えたことを他者と共有しながら

共通理解を図る。

荒井先生は、世界史で扱う図表など、文字化されていないテキストを読み解くためにフォトランゲージは有効だと考えた。だが、その手法を用いて生徒が資料の読み解きに取り組んだところ、文脈や背景を理解した上で自分の考えを述べることができる者もいれば、表面的な情報を追っただけで精いっぱいいる者もいて、生徒ごとに読解の深さは異なった。

「資料を読み解くプロセスを突き詰める中で、PISA型読解力の『情報の取り出し』『解釈』『熟考・評価』のステップに着目しました。そのステップを非連続型テキストの読解に援用することで（図1）、広い視野に立ち、国際社会に主体的に生きる『公民とし

図1

PISA型読解力のステップを援用した 非連続型テキストの読解

- ①情報の取り出し テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと
- ②解釈 書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること
- ③熟考・評価 テキストに書かれたことを知識や考え方、経験と結びつけること

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。

ての資質・能力』の育成につながるような読解力が得られると考えました」
様々な状況の生徒が読解を深められるよう、荒井先生は「スモールステップ」の問いの設定を心がけている。
「スモールステップの問いは、『何が書かれているか（情報の取り出し）』

学校概要

設立 1874（明治7）年
形態 全日制／普通科／男子校
生徒数 1学年約320人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東京工業大、東京大、一橋大、横浜国立大などに10人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、立教大、早稲田大などに延べ342人が合格。

教諭

荒井雅子

あらい まさこ
同校に赴任して24年目。地理歴史・公民科（世界史）。

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

同課題では、古代ギリシアのアテネにおける性別による役割の違いを様々

課題1 「アテネの家族」

【ねらい】

- アテネの男女それぞれの役割を確認してジェンダーバイアスに気づき、その裏づけとなる資料との関係性を探らせる。その過程で、ある時代に期待される性別役割は同時代の社会・文化的背景の影響を受けることを考えさせる。
- 現代の家族のあり方など、自分の知識や経験と結びつけて考えることで、アテネの時代性や価値観を浮かび上がらせるとともに、現代を相対的に捉える視点を養っていく。

問1 資料1には、どのような人々が描かれているか。性別、年齢、服装、想像できる役割や立場など、絵に描かれていること（または描かれていることから想像した情報）を文字化しましょう。

情報の取り出し

〈資料1 壺絵の拡大図〉
アテネの家族が描かれた壺絵。



問2 ①資料2を読んで、描かれている人にはどのような社会的役割、家庭内の役割が期待されていたのか、書きましょう。
②それぞれの情報をグループで共有しましょう。
③君たちが知っている家族の姿と、どこがどのように異なるのか、文章にしてみましょう。

熟考・評価

〈資料2 壺絵の解説文〉

大英博物館による壺絵の解説文を日本語に翻訳した文章。壺に描かれた「年上の男性」「年下の男性」「女性」について、「最年長の男性は、オイコス（家）の幸せに責任を持つ立場にあった」「若い男性は、市民と家族の長としての役割を期待されて教育を受けた」「女性には家庭を経営し、子どもを生むという2つの責任があった」など、様々な記述を紹介。

問3 資料3に示された5つの史料は、資料2に示されているどの性別の、どのような立場の根拠となりそうか、資料2に下線を引きましょう。

情報の取り出し

〈資料3 ギリシア時代のジェンダーに関する史料〉

『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』（大月書店）を参考に、ヘーシオドス『神統記』、アリストテレス『政治学』などから、ギリシア時代のジェンダーに関する記述を抜き出した5つの史料を提示。

問4 次の質問に答えましょう。

歴史の学習は、現在の視点から過去を眺めるものです。今日のテーマに即せば、皆さんは現在の家族観という視点から、ギリシア時代の家族を眺めている、ということになります。つまり、今の我々の思考は、この時代の価値観から離れることができないのです。しかし、自分の思考が時代の価値観に制約されているという可能性を理解することは、その価値観を相対化する助けになります。

さて、ギリシア時代の人々もそんな価値観にとらわれていた、としましょう。それはどのような価値観だったのでしょうか？「ある時代に期待される性別役割は同時代の社会的・文化的背景に影響を受けており、家族の背後にはその時代の価値観が控えている」という意見について、あなたはどの程度賛成（または反対）しますか？ 賛成／反対の立場を明示して、それぞれその根拠を示して意見を述べなさい。

解釈

この意見に関して、おおむね賛成します。

この時代に生きる男性がなぜこんなにも強い権限を持っていたのかというのは、「生来与えられたものであった」などに見られるとおり先祖代々こうだから、という理由に帰因します。つまり主体性を持って「自分がこうしたいからこうする」よりは共同体の秩序を優先しようとしたからだと考えます。しかし今を生きる僕らは彼らと違って「自分が客観的に見てどのような存在であるか」というのを理解しています。だからこそ、自分の一言で共同体の秩序が...とは考えず、自由に物事をとらえられるのではないでしょう。それは文明が発達している今の世界の人だからこそ分かることではないでしょうか。

生徒の記述▶

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。

な資料から読み解く中で、ジェンダーバイアスに気づかせ、性別による役割の違いは、その時代の社会的・文化的背景の影響を受けることを考えさせられた。

最初に非連続型テキストからの情報の取り出しとして、複数の人物が描かれたアテネの壺絵から分かることをワークシートに記述させた(問1)。性別や年齢、服装などのほか、それぞれの人物の役割や立場など、想像できることも記述するように生徒に求めた。

続いて、文字資料からの情報の取り出しとして、壺絵の解説文から、性別による社会的役割や家庭内での働きの違いなどが記述された箇所を読み取らせた(問2①②)。ここまでの作業を通して、男性が市民や世帯の長となることを期待されて教育を受けた一方で、女性の役割は家庭内に限定されていたことなど、壺絵から読み取った情報に意味づけをしていった。

次の問い(問2③)では、前の問いまでに読み取ったアテネの性別による役割の違いは、自分の知る家族の姿とどこがどのように異なるのかを比較して文章にした。読解のステップとしては熟考・評価だ。自分の知識や経験を基に家族像を比較し、思考を深めた生徒からは「現代よりも、当時の家族は

精神的なつながりを大事にしていたのではないか。お互いを信頼しているからこそ、内と外の明確な線引きができたのではないか」といった意見が挙がった。

次に、男性観や女性観が表れている当時の著作物など、複数の資料を提示し、同時代の人のまなざしや時代の制約についての理解を深めさせた(問3)。ここでは、最後のまとめに必要な情報を取り出させた。

まとめでは、「ある時代に期待される性別役割は同時代の社会的・文化的背景に影響を受けている」という意見について、根拠に基づいて自分の考えを論述する問いを設定(問4)。読解のステップとしては解釈だ。ここまでの学習を踏まえて、当時のアテネの価値観に立脚して思考を深める様子が生徒に見られ、例えば「概ね賛成する。男性の強い権限は『生来与えられたものであった』などの記述に見られる通り、先祖代々のものだった。そうした共同体の秩序を優先したものと考える」といった考えを述べる生徒もいた。

「探究的な問いでは、全面的に賛成、あるいは反対というケースはほとんどありません。そこで『自分はこの部分に賛成する。なぜなら……』と根拠を示すことを求めました。そうしたアウ

トプットを通して、事実に基づいて語る『事実立脚性』、及び主張と根拠の間に矛盾のない『論理整合性』の2つの視点を育てたいと考えています」

「立場性」などの観点から資料を批判的に吟味させる

荒井先生は歴史を解釈・批判する力を育む中で、特に資料を批判的に読む力を育成することを重視している。

「批判的に資料を吟味する視点を持たないと、書かれている情報を疑いなく受け入れることになります。これまでの日本の歴史教育ではあまり力を入れてこなかった批判的に読ませる学習は、生徒が社会で生きていく上で必要な資質・能力を身につけるために、今は不可欠であると捉えています」

批判的に読む姿勢が身につけていない生徒は、短絡的な思考に陥ってしまうケースがある。「世界史探究」の授業で、コルテスによるアステカ征服を扱った際、筆者の異なる2種類の一次史料を提示した。一方の史料にはアステカ王国の王は協力的だったと書かれ、もう一方には非協力的だったと書かれていたが、それを読んで「どちらかが嘘をついている」と発言した生徒がいた。

「その発言を聞いた時、資料を批判的に読む力が生徒に不足していることを痛感しました。同じ出来事であっても、立場の違いによって書き方はいくらでも変わるといって『立場性』をしっかりと理解させる必要があると改めて感じました」

資料を批判的に読むことは、読解のステップの準備段階と位置づけている。資料の立場性を十分に理解できると、その資料の文脈や背景がスムーズに捉えられ、解釈や熟考・評価などがしやすくなるからだ。

資料の一面だけで判断せず、多面的・多角的な解釈を求める

立場性を理解することの重要性を伝える課題が、戦時下の旧制立教中学校をテーマとした「戦時体制化と学生・生徒」だ(課題2)。

同課題で、当時の校長が戦争に対して協力的な考えを述べた学内誌の文章(資料3-1)を読ませたところ、生徒から「校長がこんなことを言うのはおかしい」といった声が上がった一方で、当時の校長の一言一句が軍部に報告されていた事情(資料3-2)を踏まえて、「本当に言いたいことは違っていたのだろう」「立場上、仕方なかっ

読解力とは何か？

たのかもしれない」などと分析する生徒もいた。

「1つの資料の一面だけでなく、複数の資料を基に考えること、さらにそれらの資料が成立した背景や過程なども捉え、多面的・多角的に解釈することの大切さに気づいた生徒が多かったと感じています」

「何が書かれているか」「あなたはどのよう考えるか」という問いに向き合う中で、着実に生徒のPISA型読解力や歴史を解釈・批判する力は高まってきた。初めは情報の取り出しだけで精いっぱいだった生徒から、「考えが大きく変わった」「自分の中にあつたバイアスに気づいた」といった発言が聞かれることもあった。

「中高生は社会経験が少ないために、自分の知識や経験の範囲で世の中を捉えてしまいがちです。世界史の学びを通して見方・考え方が広がることで、異なる立場に立脚して物事を考えられるようになっていきます」

3年生になると、長い歴史を俯瞰しながら思考を深める姿も見られる。

例えば、ヨーロッパの列強諸国が周辺国を次々に侵略した歴史的事実に関して、「どうして同時代のヨーロッパの人々はその行動が容認されると思ったのか」という問いを投げかけた際、

課題2 「戦時体制化と学生・生徒」

【ねらい】

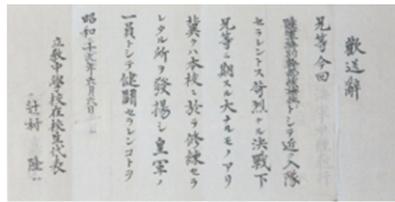
- 太平洋戦争期に学徒動員が進められた背景には、どのような時代の空気や価値観があつたのかを、旧制立教中学校の関連資料などに基づいて考察する。
- 1つの資料だけで判断せず、複数の資料を読み解き、資料の作成者の立場や時代背景を深く理解することで、多面的・多角的に解釈することの大切さに気づかせる。

問1 資料1から、戦争は学校生活にどのような影響を及ぼしていたのか。 **情報の取り出し**

〈資料1 学徒動員の制度的背景〉
学徒動員が制度化されていく経緯を示した年表を提示。

問2 資料2の歓送辞と答辞を読み、現代語訳しなさい。 **情報の取り出し**

〈資料2 戦争と立教中学生〉
旧制立教中学校から陸軍・海軍関係学校などに志願した生徒数の推移を説明。さらに生徒の送辞・答辞を提示。



歓送辞
兄等今回陸軍特別幹部候補生トシテ近ク入隊セラレントス苛烈ナル決戦下兄等二期スル大ナルモノアリ冀クハ本校ニ於テ修練セラレタル所ヲ發揚シ皇軍ノ一員トシテ健闘セラレンコトヲ
昭和19年6月6日
立教中学校在校生代表
出典：立教学院展示館第1回企画展資料『戦時下、立教の日々』

問3 資料3-1、3-2から、学校はどのような形で戦争に協力したと考えられるか、考えてみよう。 **解釈**

〈資料3-1 巻頭言「我らも征く」〉
戦時に発行された立教中学校の学内誌より、当時の校長が記した巻頭言を提示。「必ず学国の猛勇心は敵を掃蕩し、醜慮の野望を粉碎するであろう。これは我等の責務であると思う。鍛えよこの身体。磨けこの智、振り興せ大和魂。かくて我等も必ず征く。聖戦完勝のために。」などと強い言葉で生徒を鼓舞した。

〈資料3-2 戦時下の学校〉
戦後に発行された「立教のあゆみ」より、当時の在校生が戦時下を振り返る文章を提示。ミッション・スクールゆえに軍部からにらまれ、校長の一言一句が軍部に報告されていた事情を説明し、「ひとり『立教』だけが『自由の学府』の孤塁を守ることがは不可能であつたらう」「立教の存続に努められた校長先生のご心痛はいかばかりであつたらうか」などと述べた文章。

問4 教育活動が制限される中で、学校はどのように対応したのか/どのように対応せざるを得なかったのか/どう対応すべきだったのか、当時の状況を踏まえた上で、自由と制限の観点から、500字程度で考えなさい。 **熟考・評価**

生徒から「アメリカの西部開拓と共通する考えがあつたのではないかな」などと様々な意見が出された。単に覚えて理解したことをアウトプットするのではなく、自分なりの批判や解釈を加え

て相手に分かりやすく論理的に考えを伝える力が育ちつつあるようだ。「複数の資料を読み解きながら各時代について考えるワークを通して生徒の思考を揺さぶり、深められる授業を、

歴史的事実を教える授業とのバランスを取りつつ、今以上に充実させていきたいと思っています」

※荒井先生の提供資料を基に編集部で作成。

情報 で育む読解力

ICTを問題解決のツールとして活用し、 情報を多面的に読み取り、伝える力を高める

神奈川県立横浜国際高校

神奈川県立横浜国際高校の鎌田高徳先生は、担当する情報の授業で、メディアリテラシーのベースとなる資質・能力として、読解力の育成を図っている。授業では、情報・データなどを読み解いた結果を生徒同士で相互評価する機会を設けるほか、授業以外の場面でも発揮することができてこそ読解力が身についたと言えると考え、定期考査の問題を工夫している。

メディアが多様化し、 情報の読解が一層重要に

情報の授業で育成が図られているメディアリテラシー。神奈川県立横浜国際高校の情報科の鎌田高徳先生は、メディアリテラシーのベースとなる資質・能力として、読解力の育成に力を入れている。

「メディアリテラシーの定義は様々ですが、ベースとなるのは文字や画像、音などの情報の信憑性を確認する力と、相手に情報を正しく伝えられる表現力です。つまり、情報を適切に読み取って自分なりに解釈し、活用・表現できることが重要であり、それは読解力そのものだと考えています」

加えて鎌田先生は、「ICTの発展

に伴い、メディアが多様化している今、情報において読解力を育む必要性は高まっている」と語る。例えば、大半の生徒がスマートフォンを所有し、様々なアプリケーションを利用している。

その多くが、利用者の関心が高い情報を優先的に表示し、関心が低い情報は遮断するシステムを採用しているが、自分が関心を持つ情報だけに囲まれ、多様な情報から隔離されやすい「フィルターバブル」の状態にあると、偏った情報に囲まれていても、その信憑性に疑問を覚えずらくなる。

「フィルターバブルの状態にあると、接する情報量が増えているにもかかわらず、視野はかえって狭まっていきます。そうならないよう、様々なメディアが発信する情報を俯瞰したり、多面

的・客観的に捉えたりする読解力を育成することがとても重要なのです」

読み取ったデータを解釈し、 他者に伝える、生徒主体の活動

そうした課題意識から、鎌田先生は授業において、探究的な学びを通じた読解力の育成を図っている。

授業の基本的な流れは次の通り。冒頭の約10分間で、鎌田先生は本時の目標と課題の内容を伝え、課題に取り組む中で活用することになる知識・技能について、最低限の解説を行う。その後で生徒は、教科書や資料などを読み取り、インターネットで調べたり、生徒同士で話し合いをしたりしながら、課題に取り組む。



管理運営グループ
鎌田高徳
かまた・たかねり
同校に赴任して3年目。情報科。

学校概要

設立 2008（平成20）年
形態 全日制／国際科／共学
生徒数 1学年約180人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、千葉大、東京外国語大、横浜国立大、国際教養大、東京都立大、横浜市立大などに28人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ234人が合格。海外大進学22人。

読解力とは何か？

らりと変わります。生徒は、自分の手で物語の一面を恣意的に切り取って記事を作成し、設定を効果的に伝えるための見出しを立てる活動を通じて、同じ事柄でも全く異なる見せ方にすることができる仕組みを実感したと思います。多くの生徒が課題の振り返りに、『メディアは怖い』などと書いていました。情報は意図を持って発信されるものであり、それをうのみにする危険性に気づいていました」

情報の授業で高めた読解力をほかの場面で生かせるように

鎌田先生は、生徒が情報の授業で学習した内容を、ほかの教科・科目の授業や日常生活で応用することができるようになることを目指している。例えば、「見出しの立て方を工夫して探究学習の『まとめ』のスライドを作る」「授業で学んだ分析方法は、地理の調べ学習でも使える」などと、情報の授業で育んだ力をほかの場面で発揮することができる例を伝えている。

「教科書通りにプログラミングできるだけでは、意味がありません。大切なのは、学んだ知識・技能を身近な事象や自分が知っているほかの概念に結びつけて活用することです」

そのための場面の1つとして、定期考査の「思考・判断・表現」を測る問題では、授業の学習内容を踏まえつつ、初見の問題を出している。例えば、プログラミングの単元の授業では、ゲームでアイテムが当たる確率をシミュレーションする方法を学んだ。そこで、定期考査では、授業で学んだプログラミングによるシミュレーションを活用できる場面として、文化祭で模擬店を出す際に釣銭として用意する500円玉の数を算出するという設定の問題を出した。

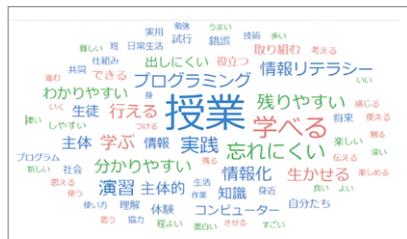
以上のような授業や定期考査を行ってきた結果、生徒対象の授業アンケートでは、「調べ学習の際、情報の信頼性を調べるようになった」「歴史の資料を客観的に検証することができた」「情報で学んだ相関係数を、数学のデータの分野と結びつけて考えることができた」「総合的な探究の時間でテキストマイニングツールを活用した」といったコメントが書かれていた。多くの生徒が、情報の授業で学んだ情報・データを読み解くためのマインドやスキルを、様々な場面で発揮している様子が見えてくる。

鎌田先生は、そうした生徒のコメントをテキストマイニングツールで分析し、ChatGPTで要約を作成。自身の

生徒対象の授業アンケートの結果を、生徒にフィードバックした内容（例）

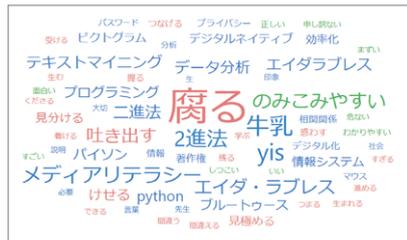
生徒対象の授業アンケートに書かれたコメントについてのワードクラウドを作成。また、Chat GPTにコメントを要約させて、そこに含まれていなかった生徒の気づきや指摘を鎌田先生が加えて、生徒にフィードバックしている。教師自身がICT任せにせず、自分で読解することで、情報をうのみにしない大切さを生徒に伝えている。

●皆さんにとって、よい「情報の授業」とはどんな授業ですか



皆さんにとって、よい「情報の授業」とは、自分で考えられる授業や社会で使える能力を育むような授業、分かりやすく簡単に説明される授業、楽しく身近に情報を感じられる授業などが挙げられます。生活に役立つ内容や実践を通じて学べる授業が好評であり、生徒が主体的に行動できる授業や体験型で楽しい授業が重視されています。また、将来役立つ内容や情報の使い方を学ぶだけでなく、実践することができる授業が好評を得ています。

●情報の授業で印象に残っている言葉



情報の授業を受けて印象に残っている言葉は「腐った牛乳」です。この言葉は、メディアリテラシーを身につける際に使われ、間違った情報を見極める力を持つことの重要性を表しています。また、パスワードの重要性やプログラミングのアイデア発想法なども学びました。学習のポイントは、情報の正確性を見極める力や効率的な情報処理能力を身につけることです。

* 学校資料と取材を基に編集部で作成。

授業改善に生かすとともに、生徒にもフィードバックして、それぞれの気づきや授業の改善点を生徒と共有している（図）。

情報やメディアを取り巻く環境は目まぐるしく変化し、その予測は難しいが、変化に柔軟に対応していきたいと、鎌田先生は抱負を語る。

「現行の学習指導要領では、『コンテンツ』と例えば『ウェブサイト全般』を指していますが、今やSNSが主流です。そのように変化が激しい情報環境だからこそ、私自身も生徒とともに学び、これからの社会を生きる上で必要な読解力を高めていきたいと考えています」

探究学習 で育む読解力

「短探究」で身につけたスキルを駆使し、
総合探究や教科学習で様々な素材を読み解く
北海道名寄高校

北海道名寄高校では、1年次1学期の「総合的な探究の時間」で探究のサイクルを学ぶ「短探究」の活動において、「多面的・多角的に見る」「比較する」などの「考えるための技法」の活用を通じて読解力を育成している。培われた読解力は、その後の探究学習や教科学習でも生かされる重要な資質・能力となっている。

全教科・科目が関連する 総合探究で読解力を育む

北海道名寄高校は2020年度から3年間、北海道教育庁「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」の指定を受け、研究テーマの1つとして「探究的思考ツールの開発」に取り組んだ。具体的には、学習指導要領に示された「多面的・多角的に見る」「比較する」など、10の考えるための技法をアイコン化し、汎用的スキル「名高探究スキル」(図1。以下、探究スキル)として、教科学習や「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で活用した。教務部部長の濱中聡志先生は、そのねらいを次のように語る。

「本校の生徒は素直で真面目ですが、

勉強は『暗記する』ことだと捉える傾向があり、『考える』姿勢と、『考える材料となる様々な情報を『読解する』力があまり身につけていません。そこで、『考え、読解する』とは具体的にどうすることなのか分かる『考えるための技法』をアイコン化し、それらのスキルの習得を支援しました」
導入当初は1年次の早い段階で、探究スキルを各教科・科目の授業の中で説明。問題を出す際は、どの探究スキルを使えばよいのかを提示した。しかし、次第に探究スキルありきで授業づくりをする教師が少なからず見られるようになったため、22年度から、各教科・科目の授業で探究スキルを活用することは任意とした。そして、1年次1学期の総合探究で、「短探究」とい

図1

考えるための技法「名高探究スキル」				
多面的・多角的に見る 	比較する 	分類する 	順序づける 	理由づける
見通す 	具体化する 	抽象化する 	関連づける 	構造化する

「名高探究スキル」は、「分類する」「順序づける」など、10の考えるための技法を可視化したもの。
※学校資料をそのまま掲載。

学校概要

設立 1922 (大正11)年
形態 全日制/普通科・情報技術科/共学
生徒数 1学年約200人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、帯広畜産大、北海道教育大、北海道大、岩手大、山形大、旭川市立大、釧路公立大、名寄市立大などに27人が合格。私立大は、札幌大、北海道医療大、國學院大、大東文化大などに延べ63人が合格。短大・専門学校進学40人。就職23人。



越石健太
探究推進部部长
こしし・けんた
同校に赴任して2年目。理科(物理)。



濱中聡志
教務部部長
はまなか・さとし
同校に赴任して4年目。地理(歴史・公民科(地理))。

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

「全教科・科目が関連する総合探究において探究スキルを活用する活動を行い、1年生全員が探究スキルを学べるようにしました。そして、その活動内容を教師間で共有し、担当の教科・科目の授業で活用できる探究スキルがあれば取り入れてもらうこととしました。総合探究と教科学習が連携することで、探究スキルの定着と、読解力や思考力の育成を目指しました（P.21に教科学習における実践を掲載）」

「短探究」は、探究のサイクルと探究で求められるスキルの習得を目的に行っている（下図）。生徒は3〜4人のチームになり、身近なテーマで探究のサイクルを回す。1テーマを4時間とし、1学期で4テーマに取り組み。

例えば、「短探究Ⅱ 紙飛行機の『飛距離』と『滞空時間』を分析しよう」では、紙の大きさ・種類が異なる6種類の紙で紙飛行機を作って飛ばし、「紙の大きさ」「紙の種類」「重心の位置」と「飛距離」「滞空時間」との関係进行分析する。分析は、自分たちのチームだけでなく、全チームのデータを使用

総合探究 1年次「短探究」4時間×4サイクルの探究学習

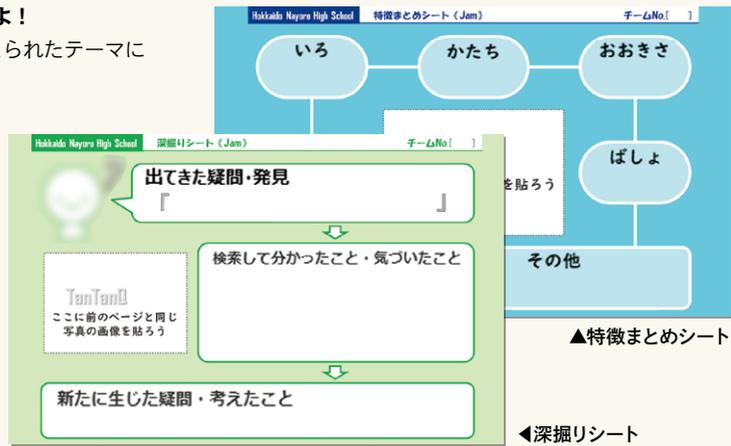
【ねらい】

探究のサイクル（課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現）を、素材・テーマを変えて短い期間で複数回経験することで、探究のサイクルと探究で求められるスキルを学ぶ。

概要 • 1テーマ4時間、4テーマ実施 • クラス混合の3〜4人でチームを組んで活動 • チームはテーマごとに編成

短探究Ⅰ 校内にある「〇〇〇」にフォーカスせよ！

- ①校内を探索し、「扉」「窓」など、チームに与えられたテーマに沿った写真を撮影。
- ②撮影した写真1種類につき「特徴まとめシート」を1枚作成（1チーム5〜10枚）。
- ③②のシートの内容を比較し、違いを記録用紙にまとめる。
- ④③の結果を踏まえて、疑問に思ったことや発見したことをインターネットで調べて「深掘りシート」にまとめる。
- ⑤調べて分かったこと、さらに疑問に思ったことなどを、1人ずつワークシートにまとめる。
- ⑥テーマが異なるチームの4人で新しいグループをつくり、⑤でまとめた内容を発表し合う。



短探究Ⅱ 紙飛行機の「飛距離」と「滞空時間」を分析しよう

- ①チームごとに、サイズや種類が異なる6種類の紙で、紙飛行機を作る（折り方は全チームで統一）。
- ②チーム内で、「紙飛行機を飛ばす人」「距離を測定する人」「滞空時間を測る人」「記録する人」の担当者を決める。
- ③紙飛行機を飛ばして、飛距離と滞空時間のデータを取る。
- ④③の結果を学年共有のオンラインシートに入力する。
- ⑤「紙の大きさ」「紙の種類」「重心の位置」の3項目で、飛距離と滞空時間がそれぞれ長かった順に6種類を並べる。
- ⑥⑤の結果を見て、気づきや疑問と、実験をしてよかった点や改善点を「考察＆分析シート」に記入する。
- ⑦各チームの代表者1人が発表する。



短探究Ⅲ アンケート調査をしよう（手順は略）

短探究Ⅳ デベートに挑戦しよう（手順は略）

* 学校資料を基に編集部で作成。

して行う。分析の結果を踏まえて考察し、その要点をまとめて発表する。

「ワークシートには、『紙の大きさ』『紙の種類』『重心の位置』と、分析の視点が示してあり、データの読み解きにおいて、『比較』『分類』『順序づけ』などの探究スキルを必ず使うようになっていきます。また、活動の最後には発表を行い、自分の考えをアウトプットする場を設けています。それらの過程で読解力も育成されると考えています」(越石先生)

考えを表現する場があったからこそ読解力は向上する

1年次2学期に行う「個人探究」では、マインドマップの作成や調べ学習などを通じて自分の興味・関心を見だし、探究したい内容をまとめた企画書を作成する(右下図)。

「教師は、マインドマップを見ながら『○○と○○はなぜつながるの?』などと生徒に問いかけます。生徒は、自分の興味・関心を多面的・多角的に見たり、関連づけをし直したりすることで、探究したい内容を掘り下げ、それを教師に説明して助言をもらうやり取りを何度もします。興味・関心の整理とアウトプットを繰り返すことで、

総合探究 1年次「個人探究」企画書の作成

【ねらい】

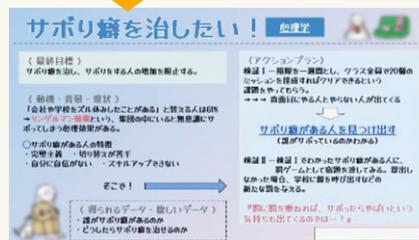
複数の活動を通じて、自分の興味・関心を深め、日常生活や社会に目を向けた上で、自分が探究したい課題を設定し、それに取り組むための企画書を作成する。

- ①各自が関心のあるものの写真を撮影し、それについて感じた疑問をグループで共有する。
- ②グループのメンバーは、疑問を解決するためのアドバイスを出し合う。
- ③疑問について自分で調べたことや②での助言などを踏まえてマインドマップを作成する。
- ④マインドマップを基に担当教師とやり取りしながら、探究したいことを企画書にまとめる。



◀企画書の見本発表時に伝えたい項目をまとめて示した。

▶生徒が作成した企画書
生徒は企画書のフォーマットを活用しながら、自分で工夫して表現していた。



* 学校資料と取材を基に編集部で作成。

自己分析する力や他者に伝える力も養われていきます」(越石先生)

そうして完成した企画書を、生徒は1年生全員分を読み、3年次1学期に行うプレゼンテーション大会まで自分が探究したいテーマを選ぶ。そして、同じテーマを選んだ生徒同士でチームを組み、約1年半かけて探究学習に取り組む。

約1年半の間には、中間発表が半々に1回程度設けられている。探究の途中経過を企画書にまとめて発表し、大

学教員や地域住民から助言を受けたり

と実感しています」(濱中先生)

(写真)、後輩と質疑応答を行ったりする。企画書の形式に見本はあるが、生徒は発表を繰り返すうちに見本をアレンジするようになるという。

「中間発表は、自分たちでまとめた探究の内容が、他者が理解できるものになっているかを客観的に捉える機会であり、自分が作成した企画書を批判的に読みます。そうしたことから、読解力を育成するには、読むだけのインプットでは不十分で、情報を解釈して考えたことのアウトプットが必要だと実感しています」(濱中先生)

探究学習で身につけた読解の技法を教科学習でも活用

教科学習では、総合探究で身につけた探究スキルを基に、様々な情報を読み解く活動を行っている。越石先生は担当する物理の授業で、物理現象を説明した文章を読み解くための方法の1つとして、絵や図を描くことを勧めている。

「文章を読み、書かれている状況を絵にしたり、図に書き込んだりすることで、問題の解答などに必要な情報を



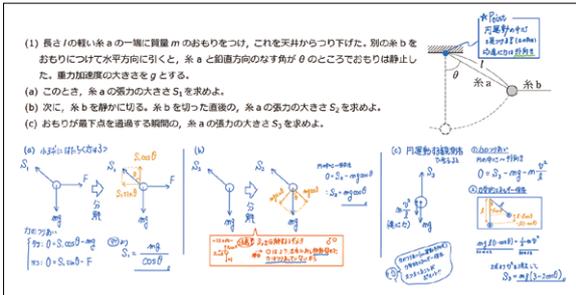
写真 生徒が地域住民に探究学習の内容を説明する「地域ゼミ」を、1・2年次合同で実施。生徒は地域住民の助言から得た新たな視点や客観的な視点を、その後の探究学習に生かす。地域コーディネーターを通じて地域住民に協力を依頼している。

読解力とは何か？

図2

物理 絵や図を描くことで、文章から物理現象を読み取る

生徒が描いた物理現象の図。「物理が得意な生徒ほど、絵や図には様々なことが書き込まれています」(越石先生)



* 学校資料と取材を基に編集部で作成。

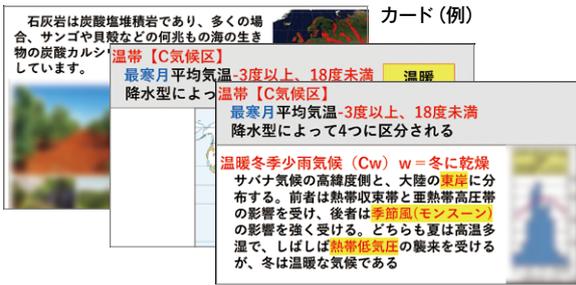
図3

地理総合 授業で行った探究学習と定期考査を連動

『温帯の気候と人々の生活』での探究学習

●授業

- ①グループ 資料集やインターネットで調べながら、24枚のカードに書かれた内容の因果関係を見つけ、構造化する。
- ②個別 ①を踏まえて、疑問や気づきなどを書き出す。
- ③グループ 各メンバーが疑問を出し合い、グループの探究テーマを設定する。
- ④グループ 設定したテーマを探究し、結果をまとめて発表する。



カードには、気候、地理、農業、食文化などが書かれている。いずれも教科書や資料集を基に、濱中先生が作成した。

●定期考査

定期考査では、初見の資料のカードを4枚提示し、日本に飛来する黄砂と砂漠化の進捗との関係を考察する記述式問題を出した。

* 学校資料と取材を基に編集部で作成。

文章から取り出すことができます(図2) (越石先生)

濱中先生は担当する2年次の「地理総合」で、「温帯の気候と人々の生活」をテーマに探究学習を行った(図3)。その活動は、温帯の気候や文化などの特徴が書かれた24枚のカードを提示し、それらの因果関係を構造化した上で、グループ内で疑問を出し合って探究テーマを設定し、調べ学習を行うという内容だ。

「どの探究スキルが使えるかは説明しませんが、生徒はカードの情報

報を比較や分類、構造化して、カードの情報から温帯の気候と文化の関係などを考察していたことから、総合探究での学びが生きていると感じました。その活動を踏まえて定期考査では、黄砂の仕組みや砂漠地域の文化・産業について書かれた初見の4枚のカードを基に、黄砂と砂漠化の進捗との関係を考察する記述式問題を出しました。多くの生徒が4枚のカードの関係を読み解き、自分の考察が書けていました」(濱中先生)

23年度は、『歴史総合』と『地理総合』の合同授業として、総合探究のチームで修学旅行の訪問地の地理や歴史を調べて発表する活動を行った。

『歴史総合』の担当教師と連携し、学校行事と教科学習、総合探究のコロナ授業を行いました。与えられたテーマについて自分たちで問いを設定する活動とし、総合探究での学びがほかの場面でも生きていることに気づけるようにしました。総合探究のチームで取り組んだこともあり、総合探究での学びを意識しやすかったようです。生徒は発表のスライドをまとめる際に探究スキ

ルを生かして訪問地の歴史を読み解くなど、総合探究での学びの成果を随所に発揮していました」(濱中先生)

普通科と専門科の混合クラスで読解力のさらなる向上を期待

今後の課題は、探究スキルの習得度の評価だ。

「知識・技能は定期考査で、思考・判断・表現は課題などの成果物で評価していますが、探究スキルが身についたかどうかの評価は容易ではありません。全教科・科目が関連する総合探究において探究スキルを評価する方法を検討し、生徒に考える姿勢や考えるための材料を読み解く力を育むフィードバックをしていきたいと考えています」(越石先生)

23年度、同校は北海道名寄産業高校と統合し、情報技術科が設置された。ホームルームのクラスは普通科と情報技術科の混合とし、総合探究や公共、保健体育などの授業は両科の生徒が一緒に受けるようにした。多様な考え方や専門性を持つ生徒と一緒に学ぶことで、多面的・多角的、また客観的に物事を捉える機会が増え、それが読解力のさらなる向上につながるものと期待している。

安全・安心な環境で「なぜ」を問い続け、 社会で求められる読解力を育む

つくば言語技術教育研究所 所長

三森ゆりか

北海道・市立札幌藻岩高校

對馬光揮

社会ではどのような読解力が求められるのだろうか。そしてそれは学校という場で、

どのようにして育むことができるのだろうか。海外の国語教育に精通し、日本人の言語技術の向上のために活動する識者と、独自の指導法で読解力の育成に取り組む国語科教師が語り合った。

「言葉の力」の差を生み出す 日本と欧米の国語教育の違い

三森 私は、全国の学校、スポーツ団体、民間企業などを対象とした、独自のカリキュラムに基づく言語技術(Language Arts)の教育・研修活動を行っています。言語技術とは、言葉の用い方を技術として捉え、語彙やつづり、文法、内容や文脈を踏まえた思考を論理的に組み立て、分かりやすく表現する作文技術や読みの技術など、言葉を操るための学びの体系を指します。

私の活動の原点は、中学校から高校時代にかけて過ごしたドイツでの経験にあります。現地の学校での学習にとっても苦労したのですが、その原因は言語の壁ではありませんでした。ドイツ

語が分かるようになって、大量の文章を読み、その内容を基に議論したり、自分の考えを論述したりする課題についていけなかったのです。一方、欧米諸国から来た生徒は、ドイツ語のレベルが私と同程度でも、そうした課題を難なくこなしていました。私は、彼らが数学のように、共通のスキルを学習しているのではないかと考えていました。

帰国して大学を卒業した後は、商社に勤めました。そこで私は、欧米のビジネスパーソンが議論の運び方や文書の作成などに長け、日本人よりも成果を上げている現実を目のあたりにしました。そうした状況は国語教育の違い(図1)によって生じていると考え、私は、言語技術の教育を自分の活動と

することに決めました。

欧米諸国では、幼少期の言語教育から体系化されています。例えば、就学前の読み聞かせでは、「なぜ」「どうして」と絶えず子どもに問いかけながら読むことで、分析的な読解、いわゆるクリティカルリーディングの芽を育みます。小学校に入ると、物語を自分の言葉で再現するリテリングなどに取り組んで、読解や作文の基礎を学び、学年が上がるに連れて自分の解釈をエビデンスに基づいて表現する方法を身につけていきます。中学校や高校ではより高度な要約や解釈が求められるようになりますが、エビデンスベースであることに変わりはありません。そうした学びが大学での論文やビジネスにおける議論の組み立て、文書の作成など

を支え、グローバルに活躍できる状況を生んでいるのです。

對馬 欧米諸国では、初等中等教育において読み書きの力を体系的に育成しているのですね。

三森 その通りです。これだけグローバル化が進むと、国際レベルの読解力を身につけていなければ、様々な面で不利にならざるを得ません。

読解力の不足が 人間関係のトラブルに発展

三森 読解力は社会人にとって必須の資質・能力です。ビジネスの成果を左右する読解力とは、読めて書ける力を指します。読むことはクリティカルリーディングができる、書くことは必要

読解力とは何か？

な情報を誰が読んでも分かるように論理的に組み立てられることを意味します。読み書きは表裏一体で、読めるから書けるし、書けるから読めるという関係にあります。

対馬 私は読解力とは、「主張」と「根拠」を理解する力と捉えています。相手が何を伝えようとしていて、それはなぜなのかという2点を押さえられれば、大きな誤解は生じないからです。さらに、自分の言葉で表現し直せると、なおよいと考えています。

三森 相手の主張を理解するといっ

つくは言語技術教育研究所 所長

三森ゆりかさんもり・ゆりか



中学校から高校にかけて4年間を旧西ドイツで過ごした経験などから日本の国語教育の課題に気づき、ドイツの母語教育をベースに言語技術を育成するカリキュラムを開発。全国の学校、民間企業、日本オリンピック委員会や日本サッカー協会などのスポーツ団体で言語技術の指導にあたってきた。文部科学省「読解力向上に関する検討委員会」などの委員を歴任。著書に『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』（大修館書店）など多数。

においては、文章でも口語でも主張が明確に示されるとは限りません。意図的に不明確にする場合もあります。そういった曖昧な表現の中の主張や真意を読み解くことも、社会では求められます。そこで役立つのが、文学を通じた学びです。文学作品では作者の意図が明確に示されることは少ないため、

北海道・市立札幌藻岩高校

対馬光揮 つしま・こうき



同校に赴任して2年目。国語科。2020年度に「国語科における教科横断型授業の可能性」をテーマとした実践で、第69回読売教育賞国語教育部門最優秀賞を受賞。若手教師による対話のコミュニティ「若手教師・教育創造MTG（巻末の「編集部からのお知らせ」で紹介）のメンバー。

学校概要

設立 1972（昭和47）年
形態 全日制／普通科／単位制／共学
生徒数 1学年約240人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、北海道大、岩手大、埼玉大、東京学芸大、横浜国立大、琉球大などに106人が合格。私立大は、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ311人が合格。

図1 欧米諸国の国語教育の例

- ・教科書に掲載される短いテキストにとどまらず、丸本（本一冊）も頻繁に扱われる
- ・読解のためのスキルを授業で指導する
- ・議論を通してテキストを読解する
- ・書かれた事実に基づいた論証を行いながらテキストを読解する
- ・解釈は1つではなく、複数の解釈が成立する
- ・読解後作文（感想文ではなく小論文）に取り組む
- ・母語以外の教科、歴史、現代社会、哲学、経済、倫理、宗教、外国語などでもテキストを巡って議論し、読解し、作文（小論文）に取り組む

※文部科学省「言語力育成協力者会議（第1回）」での三森氏の説明を基に作成。

だが、個人的にはもっと増やしたいと思っています。

生徒に文学作品を英訳させて深い解釈を促す

対馬 長い文章で読み落としがあったり、質問されたことの真意を読み取れていなかったりするのが、生徒の読解力の現状です。短文で即時的にやり取りするSNSの普及や、読書時間の減少が高校生の読解力に影響を与えていると考えられています。上級学校や社会に送り出す立場としても、読解力の育成の重要性を痛感しています。

そうした生徒の状況を踏まえて、私は国語の授業の中で、読解力の育成のための様々な取り組みをしてきました。例えば、文学作品を使った実践では、芥川龍之介の『羅生門』を題材とした授業があります（P.24実践例）。授業は、英語科との教科横断型で実施し、作品の最後で登場人物の下人が発した「きつと、そうか。」という言葉を英訳する活動を通して、作品を深く解釈することを目指しました。

また、評論『暇と退屈の倫理学』を読み、本文の内容を図解する授業にも取り組みました。授業後、生徒からは「図解するにあたって、著者の主張は

限られた情報から相手の意図を読み取る力を育成するのに格好の教材です。
対馬 同感です。文学作品を読んで自分が解釈したことを生徒同士で語り合ったり、自分の解釈を超えるために優れた批評論文を読んだりするプロセスは、社会で求められる読解力を養う上でも有用であると考えています。新課程では文学作品を扱う機会が減りまし

対馬先生の
実践例

『羅生門』を題材にした
国語と英語の教科横断型授業

◎授業の概要とポイント

登場人物の下人が最後に発する「きっと、そうか。」という言葉の英訳に取り組んだ。生徒だけでなく、翻訳者や英語科の教師の英訳も鑑賞し、多様な解釈・表現に触れて作品の読解を深めた。



◎生徒による英訳例

グループで考えた英訳	その日本語訳	解説・意図・ポイント
I see. I'm not wrong.	そうか、きっと俺は間違っていないな。	「right」ではなく、遠回しに「not wrong」にした。正しいと言い切るのではなく、間違っていないと記すことで、若干の妥協を表現した。
Will you forgive me too?	「お前も許すか？」	念を押しているという表現から疑問文にした。老婆が開き直って髪を抜く行動を正当化しているから。
I have no other way too. That's why, whatever I do, she won't hate me.	もうほかに生きる道がない。だから俺が何をしようと、こいつは私を恨まないだろう。	老婆が「仕方がないことだから許される」ということを言っていて、それに対して下人は「じゃあきっと俺も許される」と思ったからだと考えた。
I see.	そうか。	この発言は意図せず口から出たもので、「きっと、そうか。」に対応するように短いフレーズで英訳してみた。

◎翻訳者・英語科の教師による英訳例

You're sure she would, eh?	この女はお前のすることをきっと理解してくれる。そうなんだろ？
That's what I should.	それが俺のすべきことか。
Then so be it.	それなら、そうしよう。
This is humans.	これが人間なのだ。

◎生徒による振り返り

「日本語を英語に翻訳することで、内容に関する理解が進み、登場人物がどのような心情でその言葉を発したのかを深く考えることができました。また、考えたことを他者と共有することで、より深い理解につながる事が分かりました」

※対馬先生の提供資料を基に編集部で作成。

私は、授業などで最初に勇気を振り絞って意見を言った生徒に対して、「ありがとう。すごくよい意見だね」などと感謝の言葉をかけるようにしています。仮にその意見が妥当でない場合は、ほかの生徒から「私はそれは思わない」などと異議が表明されることが理想です。ただそのような時も、私は最初に発言した生徒の貢献に注目させるために、「あの意見があつたからこそ、皆さんは自分の意見と比較し、考えを深めることができました」などと最初の意見の価値を生徒たちと確認します。そうしたやり取りを繰り返すうちに、生徒は意見を言うことは自分が所属する集団に対する貢献なのだと思われ、間違いを恐れずに発言するようになります。そして、生徒間で議論が白熱しても、授業の終了の鐘が鳴れば、後隔れなく、その後の学校生活を営めるよ

何か、その根拠はどこに書かれているかを意識しながら文章を読んだ。普段、ここまでじっくり文章を読んでいなかったことに改めて気がついた」など、読解力の重要性を実感したという感想の声が聞かれました。

三森 図解という作業を通して丁寧に読解させるというのはとてもよい発想ですね。私も図解させる指導を積極的に取り入れています。しかし、それは評論に限らず、文学作品でもできます。様々な種類の作品で取り組むことで、生徒は学んだスキルがいろいろな状況に応用できることに気づくはずですよ。ただ、そうした授業は素晴らしいと思う反面、それがもし個人の実践にとどまっていれば、組織的な授業改善につながっていないとしたら、とてももっ

たいないことであり、日本の学校教育の大きな問題点だと私は感じます。対馬 個人の実践にとどめず、学校内外に実践を知ってもらうことは、教師が自身の授業改善に向けた視点を得るチャンスになると私も思います。本校でも、学校のウェブサイトを通じて授業実践を学校内外に共有し、組織的な授業改善を目指しています(＊)。

生徒が間違いを恐れずに
議論し合える場づくりを

三森 読解力の育成において、私が課題の1つだと感じているのは、「正解を言わなければ」という思いにとらわれている子どもが多いことです。日本の学校も、もっと子どもたちが自分の意見を恐れずに表現できる場にする必要があります。

＊ 市立札幌藻岩高校のウェブサイトでは、対馬先生が所属する国語科などの教育実践を公開している。
<https://www23.sapporo-c.ed.jp/moiwa/index.cfm/26,0,72.html>

本特集を振り返って

学校の中に読解力を発揮する「社会」を創る

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇



本特集の冒頭で、読者の先生方とともに考えたい「問い」として、「今後求められる読解力とはどのような力で、それをどのようにして育むのか？」と投げかけさせていただきました。その問いを探究するため、読解力の育成に課題意識を持つ読者や現場の教師に、今後求められる読解力についてお話しいただきましたが、そこには多くの共通点がありました。

その1つが、読解力はテキストに書かれていることを理解する力にとどまらず、理解したことを自分なりに解釈・評価し、それを他者に分かりやすく伝える力までを含むという点です。また、解釈・評価の際には批判的な視点が求められるという点も共通していました。正しいかどうか、立場を変えるところがどうか、多面的・多角的、そして分析的に物事を見ることが出来る力も、読解力を構成する要素ということになります。さらに、解釈・評価し、他者に分かりやすく伝える際に求められるものとして共通して挙げられていたのが論理

性であり、それを裏つけるエビデンスでした。そのように、今後求められる読解力は、複数の要素から成る総合的な資質・能力であり、だからこそ、どの教科・科目においても育成すべき力であることは、現場の教師の実践にも見られた通りです。そしてそれは、PISA型読解力の説明の中に「効果的に社会に参加するために」とあるように、社会で生きて働く資質・能力であることから、その育成の鍵は、社会に開かれた教育活動を行うことにあると考えます。すなわち、読解の対象を文章だけではなく、図表やグラフといった非連続型テキストとすることを始めとして、社会で想定される読解の場面が経験できる探究学習や他者との対話的な活動など、生徒が読解力を発揮する「社会」を、学校の中にこれまで以上に創っていくことが今、求められているのではないのでしょうか。

な関係性が構築されていきます。

對馬 人ではなく、意見を批判し合える、そうした安全・安心な場づくりは、生徒にとっても、私たち大人にとっても大切なことだと思います。

三森 企業に入社してすぐに辞める社員が多いのは、少し批判されると、自分という人間が否定された気持ちになるからかもしれません。批判する対象はあくまでも意見そのものであり、意見を発した個人ではないという認識を、学校での学びを通じて浸透させることはとても重要なことだと私は思い

ます。

日頃から教師が質問をし、読解力を育む

三森 読解は、「なぜ」「どうして」という疑問から始まります。教師が日頃から質問を繰り返すことで、生徒は理由や根拠をしっかりと考えながら読み、そして理路整然と話せるようになっていきます。そうしたクリティカルシンキングのスキルが身につくと、他者の意見に対しても、「ここがおかし

い」「どうすればよい」と、すぐに気づけるようになります。

對馬 私も生徒に質問することを大切にしています。先日、生徒が授業の振り返りで、「先生は授業で『なぜ』『どうして』と本質を追究するように繰り返し聞くけど、どんな意見も受け入れてくれるから話しやすい」と言ってくれたことはとてもうれしかったです。

三森 教師の説明に対して生徒から、「私は先生の説明よりも、こう説明する方がより論理的だと思います」といった提案が出てくるようになるのが理

想です。そのためには、生徒に「なぜ」「どうして」と問うスキルを教師が磨くとともに、自分も学び手の1人として、生徒と対話を重ねているのだと自覚することが大切です。

對馬 三森さんのお話を聞いて、物事を「なぜ」「どうして」と批判的に読み解く力を生徒に育むことが、生徒自身や社会をよりよく変えていくことにつながるのだと感じました。生徒の人生を豊かなものにするために、読解力の育成に今後も取り組んでいきたいと思えます。